

世界を造り、未来を創る創造

浜松市内中学校

井上さん

「普通」とは何だろう。それは最近の私の最大の疑問である。

二〇一五年にSDGsが採択され、達成目標年である二〇三〇年まで、十年を切った。様々な企業のCMの最後には、SDGsマーク、道行くサラリーマンの胸元にはSDGsバッジ。環境問題をはじめとする世界の問題が明るみになり、数々の問題へと立ち上がる人も多い。問題へ取り組む事が「普通」となってきたのだ。

その影響は、私の学校での学習にも及んでいる。家庭科の授業で、食品ロスを減らすためにできることを市の職員の方にプレゼンテーションをした。クラスで考えたできることは「呼びかけ」が多かった。しかし私は、「呼びかけ」だけでは未来は変わらないのではないかと考えた。そのため、毎年行っている独自の活動を今年も行うことを決めた。今年は、食品ロスという視点から環境問題を考察するために、複数のスーパーに取材を行った。

取材では、各スーパーの取り組みについて探ることができた。あるスーパーでは天候や気温からその日のお客様のニーズを予測して商品の量や種類を決めていた。他のスーパーでは、閉店間近にお惣菜がお

いてあるべきかという悩みについて語って下さった。食品ロスとスーパーの存在意義を問う難しい問題だと感じた。各スーパーに、食品の廃棄率を聞いたところ、平均で0.5五パーセントであることが分かった。金額に換算すると約九千円分であるという結果だった。さらに廃棄するための金額も加算するため、スーパーにとって無駄な出費だと話していた。

つまり、スーパーでは食品ロスを減らすことで利益にもなる、ということが言えるのだ。

では、食品ロスが環境問題につながるのはなぜなのだろうか。それは、食品ロスが出ることで、その処分のために二酸化炭素を排出するからだ。取材でも分かった通り、食品ロスの回収でも、二酸化炭素を排出している。

また、日本の食料自給率は約四割と低い。スーパーに取材に行った際も、よく見ると外国産の食品も目立っていた。外国産の食品が日本にあるということは、輸入に使った船や飛行機によって大量の二酸化炭素が排出されているということだ。

ここで皆さんに質問だ。高額な国産うなぎと低価格の外国産のうなぎがスーパーに並んでいたらどちらを買うだろうか。両者共に、同じ位の美味しさがあるのなら、多くの人が外国産と答えるだろう。浜名

湖といえばうなぎ、と言われる程、かつては栄えていた浜名湖の養殖業だが、最近は養殖場の埋め立てが進み、あまり獲れていない。外国産のうなぎの品質の向上により、浜名湖のウナギの需要が低迷したことも理由の一つだろう。利益を優先させた考え方が環境を悪化させるのだ。

この考え方は、世界的にも言えることだ。地球温暖化の原因の一つであるメタンガスは、主に牛などの家畜のおならやゲップが要因とされている。しかし、肉は人にとって必要不可欠なものである。そこで大豆ミートの開発が進んでいることを知っているだろうか。そして、大豆栽培のために、地球の酸素の四割をもたらしっているとされているアマゾンの森林伐採が進んでいることも同時に知っているだろうか。森林伐採が進むのは、開発途上国の人々の「安くてもいいからお金を得たい」という思いと、先進国の人々の「より安く資源を手に入れたい」という思いによって、発生すると考えられる。その後、結果的には環境を悪化させてしまっているのだと思う。

細かい点まで追求していくと、根本的な間違った考えが見えてきた。私は、利益を求めずに、今を生きる私たちが無理をする形での対策は必要ないと思う。持続可能ではないからだ。

コロナ渦の今は、様々な情報に翻弄され、誰もが闇の中を進んでい

るような状況にある。人と人のつながりが希薄であるがゆえに、常識や普通という感覚が鈍り、今までとは違う斬新な考え方が生まれている。この状況でできることは少ないが、逆に捉えると、新しい普通を人々が受け入れやすくなっているとも言えるだろう。今こそ行動を起こすチャンスだと強く感じる。

私の家では基本的に、野菜の皮は剥かない。買い物でも、見切り品を見て、献立を考えている母の姿をよく見る。「今あるものを無駄にせず、大切に使い切ること」を続けていけば、きっと日常になり、普通となるはずだ。

環境を守るための対策が、連鎖的に世界の普通となっていくことで、持続可能な範囲で、対策の浸透が実現されるだろう。

あなたにとって「普通」とは何だろうか。国や企業が環境問題に対して立ち上がり、多くの人が協力している普通、それとも誰もが環境問題を見て見ぬふりをしている普通。あなたは、どのような世界を造りたいだろうか。持続可能な未来を共に創ろう。